

## 盗みを主訴とした7才女児の症例

\* 研究第6部 松尾利久子

研究第9部 多勢豊次

### 1. 症例について

N. A 治療当初年令 7才4カ月

〔主訴〕 学校から、友だちの鉛筆、ケンゴムなどのこまごましたものを持ち帰る。

〔家族〕 実父—39才 会社員（大学卒）、実母—33才 無職（高校卒）、弟—6才 幼稚園

〔生育歴〕 熟産、正常産、生下時体重2880g、人工乳始歩1才1カ月、始語1才1カ月、既往症、水痘、麻疹、泉熱

〔現在〕 体格は普通、健康である。

〔諸検査結果〕 知能—（鈴木ビネー）6才8カ月／5才9カ月 IQ116、8才9カ月／7才4カ月 IQ119、性格—（幼児、児童絵画統覚検査、CAT）心理治療開始直前実施、(1)、母親に甘えたい、かまってもらいたい気持が強いのではないか、(2)友だち関係がうまくいつていない点があるのではないか、(3)自己顕示的傾向が強い。（絵画—欲求不満テスト、PFT）治療開始8カ月後（治療終了2カ月前）に実施、CATをする予定であったが、本児が子どもつばいテストだからいやだということで本テストを行った。(1)集団順応度（G.C.R）54.4%は標準53.8%よりやや高く、常識的適応を示している。(2)E%が平均より高く、過度の攻撃性を具えている。(3)Mの出現が低いところから、社会成熟度がやや低い。(4)自己中心的である。

### 2. 治療経過

〔治療の開始〕 母親から本児が最近学校の友だちのもの（鉛筆、ケンゴム、手帳など）を黙って持ち帰り、強く追求しても「知らない」の一点ばり、「子供の性格がつかめなくなつた」という訴えがあり、面接の結果、心理治療が適当と思われたので、母と子に心理治療を実施した。週1回、通算34回、10カ月にわたり子供には遊戯療法による個人治療を行い、母親にはカウンセリングをした。担当は子供が松尾、母親は11月から4月までは週1回で多勢、4月からは月に1回、森脇があつた。

〔治療経過〕

治療過程を概観すると、1回から5回までは、母親か

らの分離もスムーズであつたし、セラピストに対しても拒否的態度は見られず、ごく自然に遊戯場面にとけこんだ。話の内容は弟のこと、家でのあそびが中心であつた。1回に「弟はペンの持ち方は上手だけれど、はしの持ち方は私の方が上手」という弟に対する競争心が述べられた。1回と3回には「どういふこどもが、ここにくるの？」という疑問もはなされている。1回から5回までは、ゲームあそび、ベタツク、粘土などの机上であそぶものに限られ、行動範囲は広がらなかつた。5、6、7回には粘土あそびをしたり、絵をかいたりした。大きい画用紙を一ぱいに使つて、絵の具でクリスマスツリーやスキーの絵を大胆に書く。手の汚れや、絵の具のしみなどはあまり気にしない。この時期にはあまり問題になることはなかつた。場になじみつつあつた段階である。母親から今週もケンゴムを持つて帰つたという報告があつた。以前と変わったこととして、母親にべたべた甘えるようになった。弟に対しても今迄はいいたいこともいえず、めそめそしていたのに、「弟なんかどこかに行つてしまえばいい」ということもあるという。8回には机のそばを離れ、積木で家や、店屋を作り、行動的なあそびをする。9回、10回にも同様のあそびをする。始めに積木で家を作り、その中にゴザを敷き、ママゴトのセットを並べ、セラピストを母親にさせ、本児は子供になつてあそぶ。それがおわると店屋ごっこをする。本児が店屋になり、果物を店に並べ、両方の家に電話を置き、本児は電話で取りつた品物を乳母車にのせて配達する。この時期は内容の豊富な、部屋全体を使つた動きのあるあそびを展開した。11、12、13回にはぬり絵あそびをする。ぬり絵をぬりながら「先生は私のいつたことを真似している」とか「あなたの好きなようにしてもいいのよ」というセラピストの言葉を真似していう。直接セラピストに関心を示し始めている。母親からは本児が来所の行き帰りにいろいろなことを話してくれるようになったという報告があつた。また数日前に母親が寝坊して本児が学校に遅れそうになつた時「ママのために！」とぶんぶんおこつて出掛けたが、帰つてから「ママの悪口いつてごめんね」とあやまつた。いままでにはなかつ

(\* 本症例の治療に関する全般的指導を森脇第六部長からいただいた。)

たことであるという報告もあつた。母親との間に感情の交流がなされてきたようである。15回、16回には人形あそびをする。画用紙で人形の家を作り、その中に応接セットやベッドを並べ、庭にはスベリ台、ブランコを置く。二つの人形を姉と妹にみたて、自分は妹になる。乳母車にのつたり、スベリ台からすべつたりするが、話し方は甘えた調子で、赤ちやん言葉を使う。ママゴトあそびでも同様の話しぶりをしてるので、この regressive behavior は、この時期の本児の行動特徴と考えてもいいと思う。17回、18回にはレゴをする。レゴをセラピストと一緒に組み立てながら、「先生、泥棒したことある？ 泥棒は悪いことだから、私はしないの」という。この言葉が意味するものは何か、またこの言葉が本児の盗みとどういう関係をもつのか、それを確実にとらえることはできないが、少なくとも本児が泥棒という行為を悪いことだと思つていることは明らかである。19、20、21回にはゲームあそびをする。本児はゲームの勝敗を大変気にする。自分が勝つようにサイコロを何度もふる。トランプにおいても同様で、セラピストが勝つても知らんぷりをしているのに、自分が勝つと「これで3回も勝つた」と口に出している。ゲゼルは7才児はすでに負け上手になる時期だといつており、この点やや未熟なものを感じる。24回、25回にはクレヨンで図案を書く。それは現在学校でやつている教材のようである。本児は横で書いているセラピストの絵に対して「学校の先生はそんなへたにまるを書かない。いろのくみ合せがへただ。そんなことも知らないのはばかだ」とさかんに批判する。態度もとげとげして、セラピストに挑戦するような調子である。以前に絵を書いた時には「先生と私と、どつちがうまいかな、やつぱり先生の方がうまいね」といつており、その間には大変な変化を見せている。この攻撃的態度は26回、27回も同様に示された。約一月続いたことになる。丁度この時期に行つた PFT も、過度の攻撃性を示しているとのべており、この時期の特徴を裏付けている。28回に紙芝居を見つける。大変気に入つて、セラピストを聞き手にして、時間一杯読んでいる。紙芝居の裏についてる番号と表の番号が合わないの、セラピストが指摘するが、自分の方が正しいといつて受けつけない。29回、30回にも紙芝居を読む。30回にはようやくセラピストに読んでくれといひ、自分が聞き手にまわる。31回、紙芝居をやめて、ワンワンゲームをする。ゲーム中は相変わらず「ずる」をする。しかしこの回には「ずるは3回までしてよい」ことを自分で決め、その通りにする。そしてセラピストにも3回ずるをしてもいいという。30回ごろからいらいらした態度は大分薄らいで来て

本回では、どうやら落ち着きを取り戻したようである。

セラピストが、新しいトランプのやり方を教えたところ素直に聞いている。セラピストが何度も勝つたが、最後迄、いやな顔をしないであそんだ。その後夏休み1カ月を経過して33回にはベタツクあそびをする。ベタツクは既に封が切られたもので、半分程しか袋に入つていなかったが、色や形を工夫して海の絵を仕上げる。「この次新しいベタツクを用意しておいてね」と注文する。34回、風邪で2週間休んで出て来た。レゴをする。線路を作り、その上に車を走らせる。セラピストに自分の使う形のレゴをさがしてほしいという。セラピストが「もうない」というと「それならこちらにもいい考えがあります」と、ちよつとおどけた調子でいう。またこの回には「うん、そうよ」とか「まあ、そういうことね」という肯定的な表現が見えている。以上が心理治療の経過であるが30回に安定をみせ始めてから、夏休みを経過した。その後のセラピーでも、安定感も持続しており、親子関係も好転しているし、3カ月の産休をとり9月に学校に戻つた担任教師からも本児の態度が非常に明るくなつた、と報告があつて、34回をもつて心理治療は一応の終結にした。この時期迄は主訴の盗みは報告されていない。(しかし後述するが、終結後、担任教師からまた盗みをしたという知らせがあつた)。

次にセラピー中の行動変化を簡単に述べると、治療開始から2カ月間はごく普通の態度で遊戯場面に適応し、それに続いて、あそびの範囲が広がり、部屋全体を使つて、活動的にあそんだ時期が1カ月あつた。次にセラピストに関心に向け、セラピストの言葉、表現に批判的だつた時期がある。それに続いて人形あそびで regressive behavior を示した時期が来る。その後1カ月間、口頭による攻撃があつた。それに続いた2カ月間は、紙芝居をしながら徐々に安定していつた時期である。つまり本児の行動を、普通一退行一攻撃一安定という型でとらえることができる。

### 3. 考 察

次に主訴である盗みについて、その発生要因となつたものは何かを考えてみる。

高木<sup>2)</sup>は「盗みは個々の子供の生活環境に対する特別な反応と見なければならぬ。多くの子供は親の受容と愛情の欠如を物質的に代償するために盗みをするということは確かである」といつている。本児の場合も、1カ月いくらかきめられた小使をもらつており、物質的には特に欠乏しているという状態はなく、交友関係の悪化もいわれていないので、次にのべるような理由から、本児

の盗みは主として、母親との不安定な関係から生じた不適応の一つの symptom と考えることができよう。

その当時の母親の本児に対する感情であるが、本児がまだ小さかった頃、本児の父親が末子で、姑は他の兄弟の家でも拒否され、本児の父親が、母を家に迎えた。ところが本児の母親は「子供の入った風呂には入れないので銭湯に行く」という姑の態度や、長時間、母の部屋で過ごす夫の態度に不満を感じ、体重が非常に減る程であった。その後、転任を機会に姑と別居した。(現在姑はアパートで一人で生活している)父親は将来、家を作る時に、また母を呼ぼうと考えており、本児の母親の気持は現在も不安定な状態にある。母親は本児がその祖母によく似ており、どうも真に可愛いという気持になれない。むしろ弟の方が可愛いと思うとのべている。本児に対してはしつけは相当厳しかったという。セラピーの付添にきた母親の実母も「この娘の叱り方は厳しい」ということをいつている。母親の本児に対する評価は、ずるいところがある。いい抜けをする。欲望が強い。物を欲しがる。すぐ気持が悪いという。先生に手をかけてもらいたがる。など、いろいろ欠点を上げている。又担任教師が本児のよい点を上げて、母親はなかなかそれを認めたがらないと言われていた。その点からみて、母親は本児に対してかなりの不満をもち、本児は担任教師に「お母さんはきらい」とのべて、母と子相方に否定感情が存在していることが明らかである。これらの点からわれわれは本児の盗みは、親子関係がもたらした、不適応行動であると考ええる。

そこで、われわれは母親の子どもに対する態度、および子どものパーソナリティの改善のために、母と子に心理治療を行ったわけであるが、前述した治療の経過をたどつて、次の変化を得ることが出来た。

(1)母親が、厳格な態度を改め、本児を受容しようと努めるようになってきた。(2)子どもの盗みに対しても、強い詰問はやめた。(3)一方子どもは、母親に甘えるようになり、話もよくするようになった。(4)年の近い弟にひきめを感じていたが、現在は物がはつきりいえるようになった。(5)担任教師が驚くほど、表情や態度が明るくなった。以前は警戒するような態度が見られたという。

主訴の盗みはセラピーの中頃より少なくなつて、終結時までは殆んどなかつたが、終結後に担任教師からまた

盗んだという報告があつた。

なお、その後の経過をみたところ、終結直後の盗みのあと2カ月たつた現在、盗みは発生していない。学校生活における本児の行動は、非常に明るく、友人関係もスムーズにいつているという報告があつた。姑の問題をめぐる父母の争は解決されておらず、その点に若干の問題が残されており、今後共、経過をみていきたい。

#### 4. 要 約

本児は、母親との関係がよくなくて、盗みは主としてこの不適応の一つの symptom として起きたと考えられるので、母親の子どもに対する態度、および子どものパーソナリティの改善のために、母と子に心理治療がなされた。子どもに週1回、全部で34回の治療を行った。治療は次の四つの段階を経過した。

第1期(1回~8回)普通の態度で遊戯場面へのぞんだ。

第2期(15回~17回)regressive behavior が増加しママゴトあそびでは子どもになりたがり、人形あそびでも非常に幼稚なしぐさをした。

第3期(24回~27回)セラピストに対する言語的攻撃が多くあらわれた。

第4期(31回以後)心理的安定がもたらされた。

この様な経過をへて、母親と子どもの関係は回復され子どもは担任教師がその変化に驚く程、明るい表情および態度を示すようになった。盗みはセラピーの中頃より回数が少なくなり、終結時までは現れなかつたが、終結後、また盗みがあつた。しかし、その後2カ月の経過をみたところ、盗みは殆んど現われていない。学校生活では、相変わらず非常に明るく、活発で友人関係もうまきいつていると担任からの報告があつた。

#### 【文 献】

- 1) 高木四郎：児童精神医学各論 P.605~606 慶応通信
- 2) A・ゲゼル、周郷博訳：学童の心理学 大日本図書
- 3) 森脇 要他：子どもの心理療法 慶応通信
- 4) 堀 要：「子どもの心理療法」小児の精神と神経 5巻2号、3~14頁

## A Case Report on a 7-years-old Girl with Stealing

Tokuko Matsuo, and Toyoji Tase

We report the case of psychotherapy on the 7-years-old girl who steals, because of her relationship with mother.

The girl had been in psychotherapy for about 10 months (once a week and 34 sessions in total), and her mother had also been treated for the same period.

We could find out four characteristic phases through the psychotherapy of the girl:

- 1) She behaved quite normally in the playroom (from 1st. to 8th session).
- 2) She often showed some forms of regressive behavior:  
when she played house, she took the role of a baby, employing infantile expressions and manners (from 15th to 17th).
- 3) She made verbal aggression against the therapist (from 24th to 27th).
- 4) She was found stabilized emotionally (from 31st to 34th).

During ten months mentioned above, good relationship between the mother and the child had been established, and at the same time, her behavior of stealing gradually decreased. The case needs to be followed under the close contact with the mother and the school teacher.